

第3 1回鹿児島市域糖尿病医療連携体制講習会

座長： 鹿児島大学大学院 糖尿病・内分泌内科学

教授 西尾 善彦 先生

糖尿病医療学の実践

—スティグマやクリニカルイナーシャの意味を含めて—

2024年7月16日(火) 鹿児島県医師会館

Diabetics

Diabetic patients

Patients of diabetes

→ **Person with diabetes (PwD)**

糖尿病患者

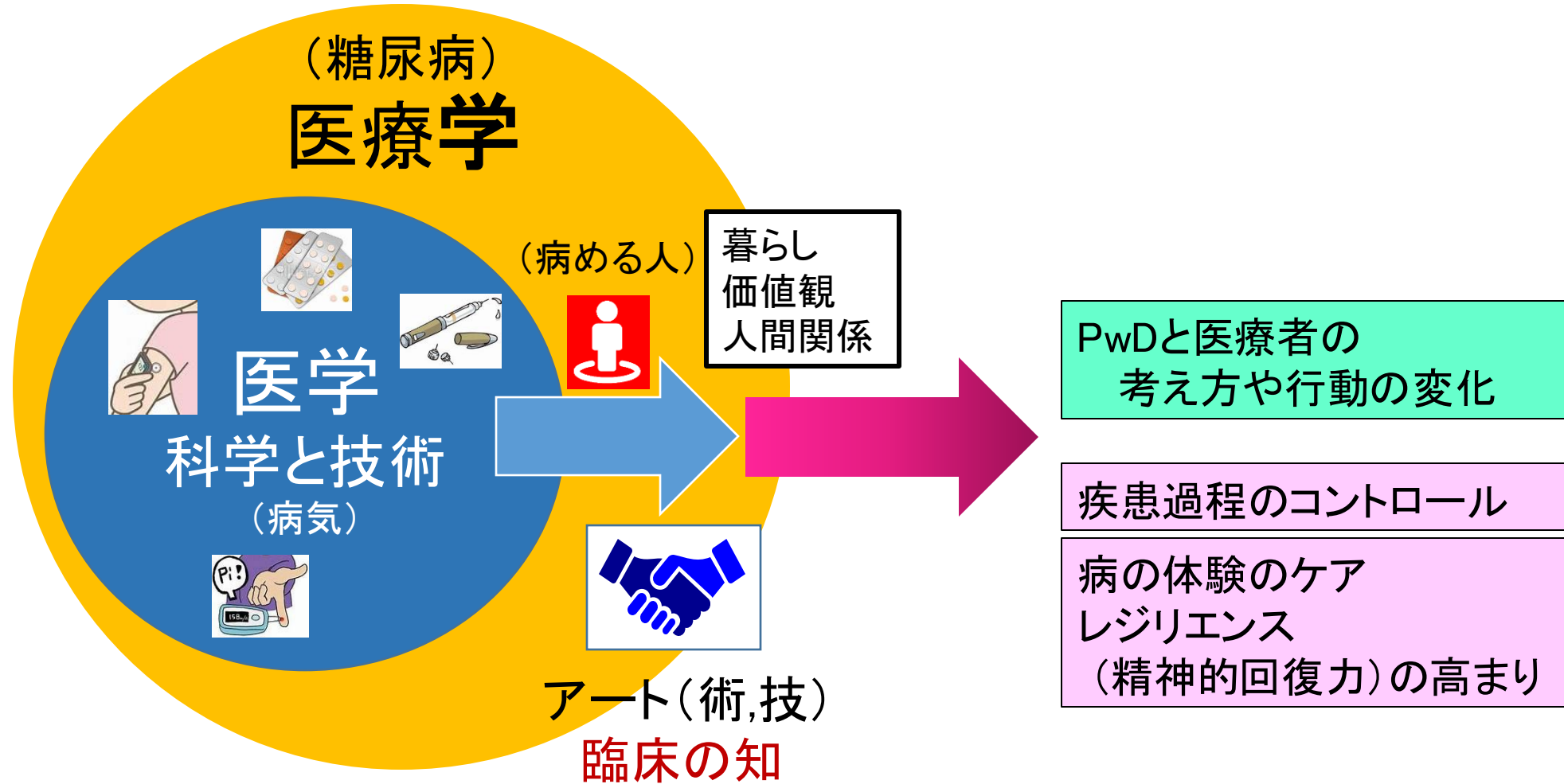
→ **・ 糖尿病を持つ人**

・ 糖尿病患者

(・ 糖尿病を持って生きる人)

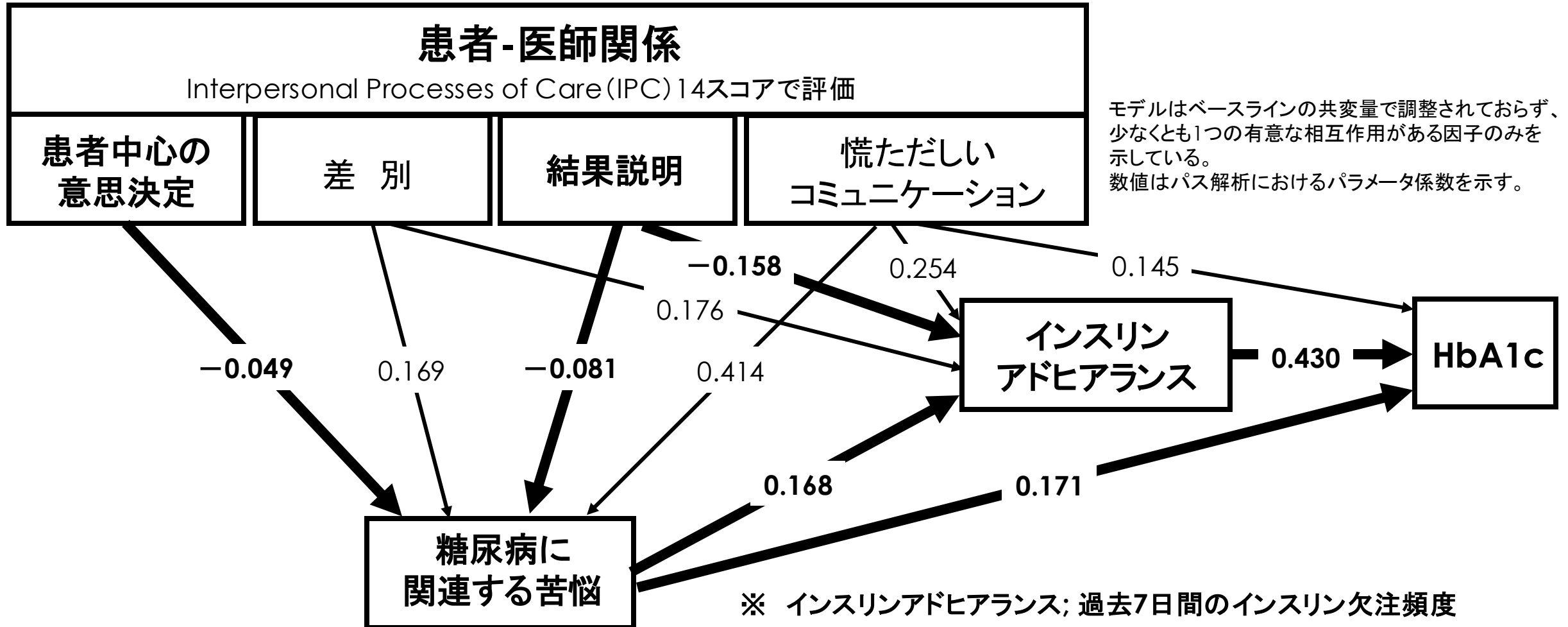
(・ 糖尿病とともに生きる人)

糖尿病医療学とは

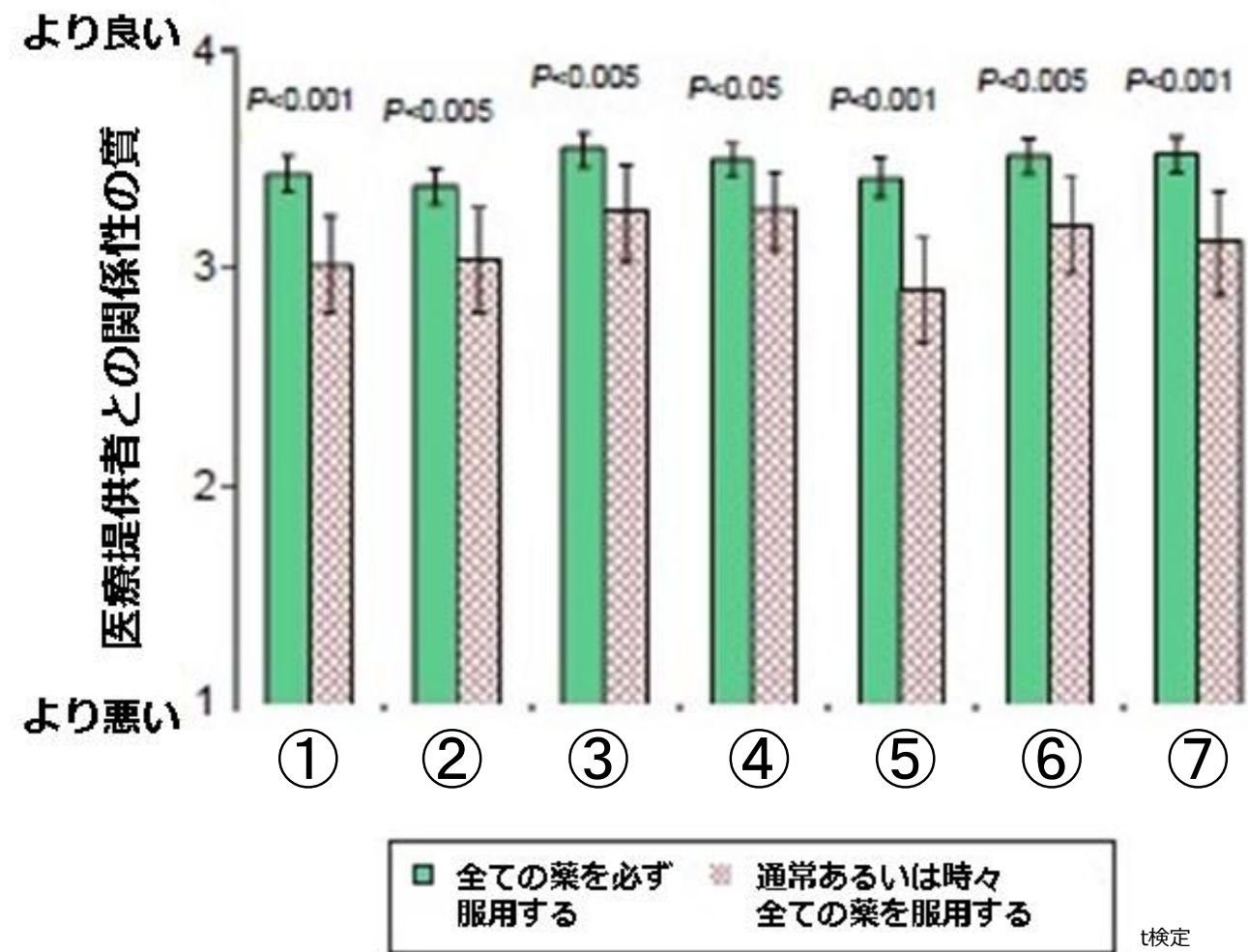


医療とは、科学(医学)を基盤として、人の疾病の診断、治療、予防、健康の支援に努める術(アート)である。それは元来、「癒しの術」とよばれた技術的・人間的行為であり、患者と医療者の双方向性の関わりによって成立する。

良好な患者-医師関係は糖尿病関連の苦悩を緩和して インスリンアドヒアランスとHbA1cの改善に寄与する



服薬アドヒアランス別にみた医療提供者との関係性の質



<医療提供者との関係の質尺度項目 (HPRQ)>

- ① 私の医療提供者は私の話をよく聴いてくれます。
- ② 私の医療提供者とのコミュニケーションは容易です。
- ③ 私の医療提供者は尊厳と敬意をもって私に接してくれます。
- ④ 私の医療提供者は私の病歴について最新の情報を持っています。
- ⑤ 私の医療提供者は私と十分な時間を過ごしてくれます。
- ⑥ 私の医療提供者は私を一人の人間として扱ってくれます。
- ⑦ 私の医療提供者を信頼しています。

スティグマ

「烙印」

古代では、奴隷や犯罪者などの社会的身分が低い人が一目見てわかるように、体に焼き印(烙印)を押すことが通例であり、烙印を刻まれた人を劣等視していた。このような流れから、ある特定の属性(同性愛、生活困窮者、精神疾患患者など)を持つ人を否定的にみなす“しるし”としての意味合いが強い。そして、そこから生じる否定的態度という側面が強調されたのが偏見、直接的な行動としての側面が強調されたのが差別と考えられる。

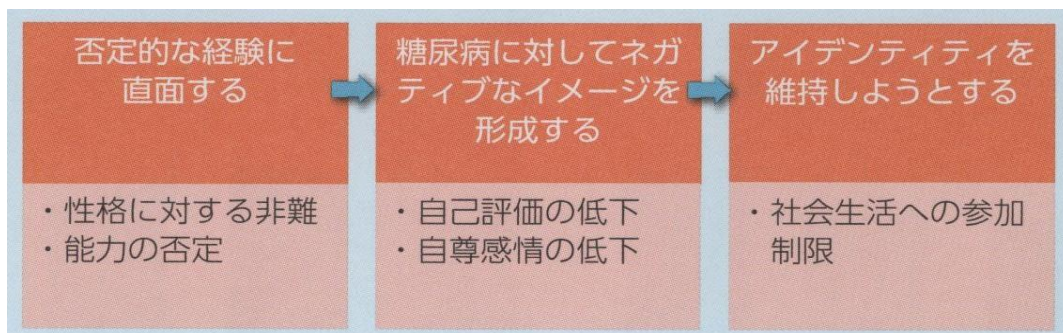
糖尿病におけるスティグマの類型

	社会的スティグマ (社会的規範からの逸脱, レッテル)	乖離的スティグマ (模範的な糖尿病患者のイメージからの乖離)	self-stigma セルフスティグマ (自尊心の低下)
experienced stigma 経験的スティグマ (実際に経験)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生命保険に加入できなかった ・ 住宅ローンを断られた ・ 就職できなかった ・ 寿命が短い 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 間食をとがめられた ・ インスリン注射を拒否すると叱責された 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「糖尿病」という病名や診療科 ・ 想定外の治療成果に対して医療者に「すみません」と謝る
perceived stigma 予期的スティグマ (スティグマへの恐れ)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 糖尿病のことを上司・同僚・ときに家族にも言わない 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 渋々注射をしている ・ 隠れ食いをする 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 宴会や会合に行くのをやめる ・ 誰にも相談しない

田中永昭 糖尿病プラクティス 38(2) 2021を一部改変



2型糖尿病患者の否定的経験に対する反応

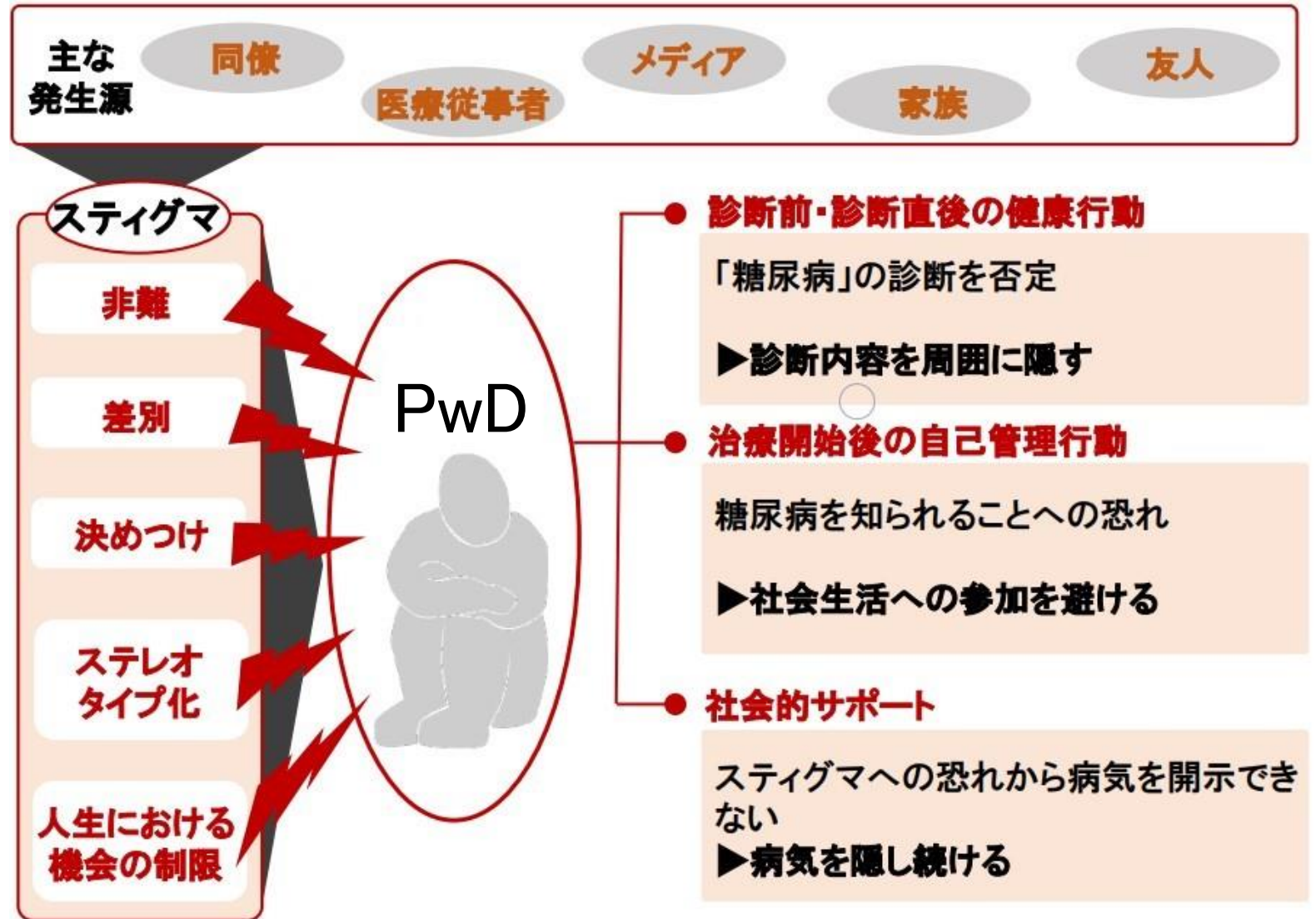


加藤明日香 糖尿病プラクティス 38(2) 2021

スティグマの内在化

PwDが、社会に存在する糖尿病に対する否定的な固定観念(ステレオタイプ)に気づき、自分は社会や他者から差別的な扱いを受けるに値すると認め、糖尿病であることを理由に自分自身に対しても否定的な態度をとるようになること。

PwDに対する スティグマの 影響(まとめ)



日本糖尿病学会・日本糖尿病協会のアドボカシー活動

糖尿病の正しい理解を促進する活動を通じて、糖尿病をもつ人が安心して社会生活を送り、人生100年時代の日本でいきいきと過ごすことができる社会形成を目指す活動（アドボカシー活動）を展開。 ➡ 糖尿病をもつ人にスティグマを付与しない社会

Advocacy(アドボカシー)とは？

適切な日本語標記は無い。

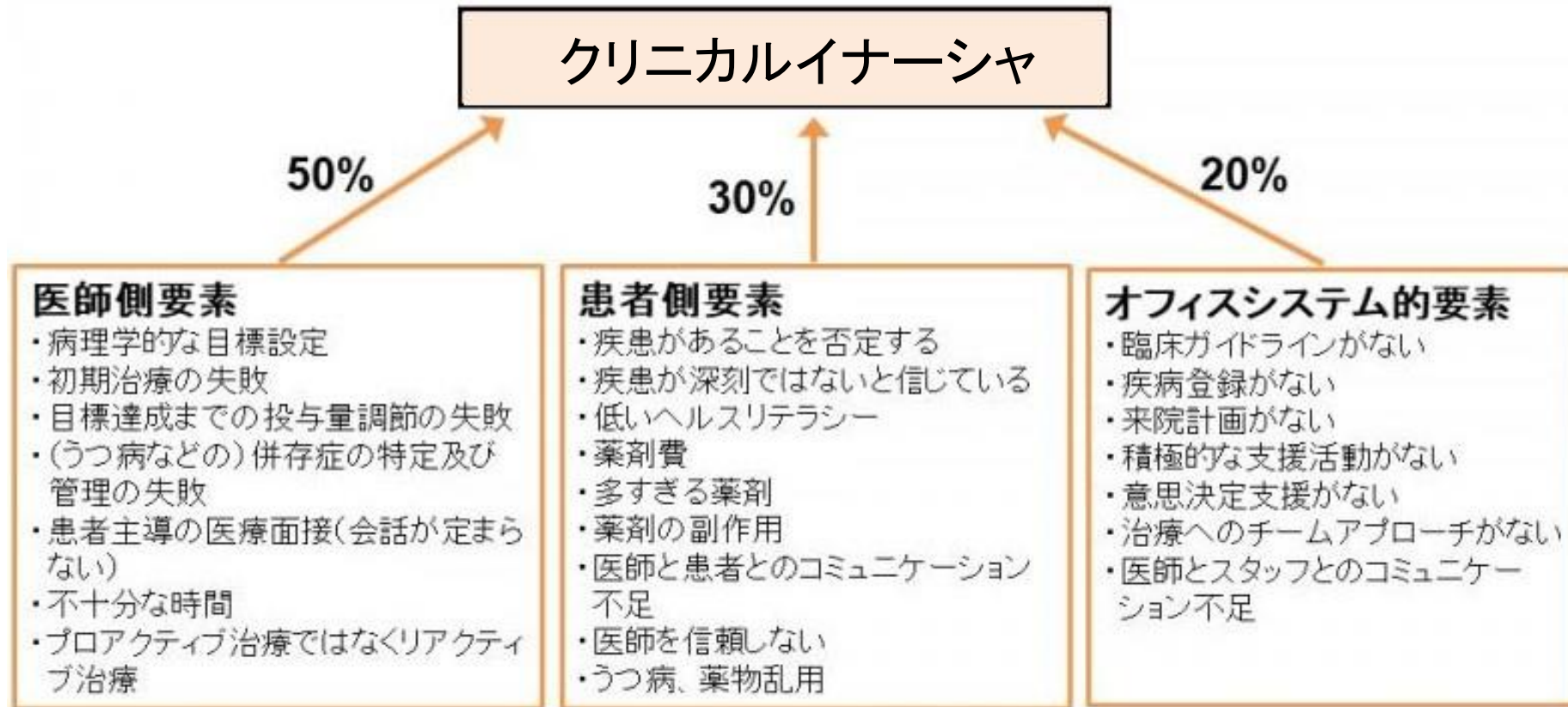
患者中心の、患者に寄り添う医療？

(患者擁護の視点)

クリニカルイナーシャ(臨床的惰性)

「治療目標が達成されていないにも関わらず、治療が適切に強化されていない状態」

Khunti K, et al. Prim Care Diabetes. 2017; 11 (2) : 105-106



【学び】

・この人が糖尿病をもったこと、あるいは治療ができないことの裏に隠れているものは何かを探らなければ、問題の本質的な解決にならない。

河合隼雄・石井 均:病を引き受けられない人々のケア より

・患者が**自分の病を語る**こと自体が、病を**自分の体験として**受け入れ、慢性の病を耐えうるものにする手段として有効である。

アーサー・クライマン:病いの語り 慢性の病いをめぐる臨床人類学 より

・糖尿病治療では患者さんの**心の語りを聴くこと自体が治療**である。

皆藤 章・石井 均:病を引き受けられない人々のケア より

・悲しみに向き合い、物語に助けられながら、どうにか現実との折り合いをつけるためには、自分にとっての**物語を紡ぎ直す**必要がある。

入江 杏:わたしからはじまる -悲しみを物語るということ- より

・待つことは・・・中略・・・**相手がおのずから発酵**しはじめる、そのように**関係の布置としての場が熟れる**のを待つことである。

鷲田 清一:「待つ」ということ より

【学び】

- ・沈黙は孤独の状態に入るための空白の時間であり、孤独がなければ自分の中の豊かな対話も行われぬ。語り手は、同時に聴き手として自らの語りに耳を傾け、対話が始まる。強いられたそれでない限り、**沈黙もまた対話であり、語りである。**

入江 杏: わたしからはじまる - 悲しみを物語るということ - より

- ・難しい人ほど、言葉がなくなります。希望をもっていませんのでね。それでも、こちらにやる気があれば、**希望をもってその人に会い続ける**ことです。・・・それを続けているとだんだん変わってきます。

河合隼雄・石井 均: 病を引き受けられない人々のケア より

- ・ケアとは「**時間をあげる**」こと、あるいは**時間をともに過ごす**、ということ自体がひとつのケアである。つまり「**いる**」というの**はゼロではない**。なにかをしてあげないとプラスにならないのではない。

鷺田清一: 「聴く」ことのカより

糖尿病医療学の実践

良好なPwDと医療者の関係性



医療学

技・技術(アート)

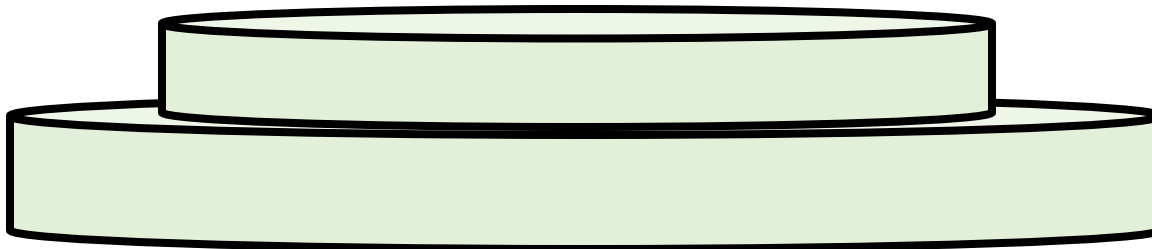
- ・行動医学的方法
- ・コーチング,
- ・動機づけ面接法 等

医学
科学と技術
(病気)

PwDと医療者の
考え方や行動の変化

疾患過程のコントロール

病の体験のケア
レジリエンス
(精神的回復力)の高まり



糖尿病医療学の実践

良好なPwDと医療者の関係性



医療学

技・技術(アート)

- ・行動医学的方法
- ・コーチング,
- ・動機づけ面接法 等

PwDと医療者の
考え方や行動の変化

疾患過程のコントロール

病の体験のケア
レジリエンス
(精神的回復力)の高まり

・PwDの物語を聴く(共感する)

・医療者が希望を持ち続ける

・PwDの前に誠実に在り続ける

・PwDに時間をあげる(待つ)

医学
科学と技術
(病気)